

日本建築の方法 静的と動的 対現象理論  
 感覚と理論 『住宅建築』と『住宅論』

### 1. 研究の目的と方法

本研究では、建築関連の雑誌上での篠原による言説やそれに対する研究では取り扱われることがなかった、篠原一男の特に初期の学会論文に焦点を当てる。(fig01)それは「日本建築の方法」と銘打たれた12の論文であり、主に日本建築の空間性についての研究である。

一方で、日本建築の空間性についての研究は他にも多くの建築史家らによってなされている。実際に篠原の論文を読んでもと、他の研究との立場の大きな相違が見られ、これを篠原の考え方の特異性とみることができるであろう。

よって本研究の目的は、まずこれらの相違を調べ篠原の特異性を明らかにした上で、その彼の建築活動に対する位置づけ、さらには彼自身の建築作品に与えた影響について考察することである。

これらの学会論文には、昨年逝去した篠原の最初期の考えが記されていると推測される。一方で、この学会論文を取り扱った篠原一男研究はほぼ確認されないといえる。よって、これらの学会論文から篠原一男を再び検証することは意義があることであると考えられる。

### 2. 篠原一男の学会論文

篠原が1957年から1964年までに発表した初期学会論文、「日本建築の方法」1〜12の理論を確認した。

#### 2-2. 篠原一男の学会論文

はじめに篠原一男が発表した学会論文及び学会大会講演論の内容を一通り確認した。その内容から初期・中期・後期のように分類した。なお初期と中期・後期は研究主体および内容的にあまり関連していないので、本研究では初期のものを主に扱うこととする。

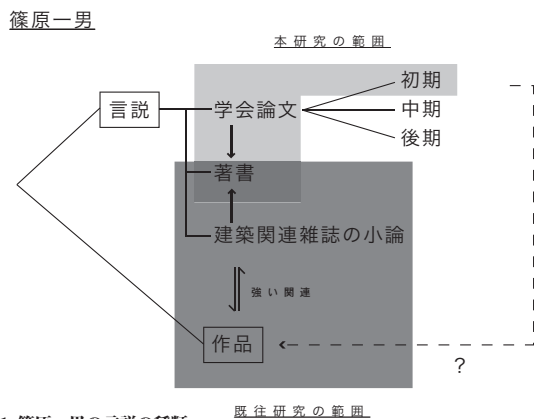


fig01. 篠原一男の言説の種類

### 2-3. 初期論文の詳細及び『住宅建築』での総括

初期論文の詳細を確認しつつ、篠原の著書である『住宅建築』において初期論文がいかに総括されたのかを追った。同書は初期学会論文「日本建築の方法」12が発表された直後の1964年に出版されており、内容的にも初期論文の論理を色濃く継承しているとみられる。また、初期論文と『住宅建築』での理論の比較だけでなく、同時にこれらの理論の理論的・時代的背景となっていると考えられる理論との比較もここでを行った。篠原の初期学会論文は、日本建築の空間性についていわば歴史と結びつけての論証を試みている。理論的背景としては、西欧建築の空間性を扱ったものとしてS・ギーディオンによる『空間・時間・建築』、日本建築の空間性を扱ったもので、先行研究として太田博太郎、同時期のものとして井上充夫による研究などが挙げられる。また、時代的背景としては、1950年代日本建築界に起こった一つの大きな動きである伝統論争を扱った。

これらの背景を確認することで、この篠原の初期学会論文の特異な点が鮮明化された。

#### →小結

■日本の空間概念 = 「静的<sup>\*1</sup>」(⇔近代西欧の空間概念 = 「動的<sup>\*2</sup>」) 他<sup>3</sup>の理論的背景との比較からも分かったように、日本の空間概念をあくまでも「静的なもの」としていているところに特徴がある。(fig02)例えば、「継時的に人の移動により空間を体験する」と評価されることの多い「廻遊式庭園」にさえも、篠原は「静的」だと述べている。

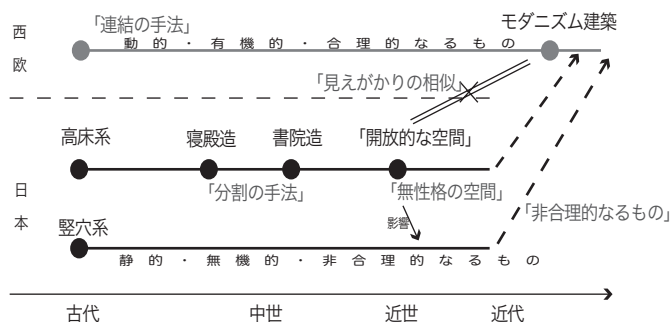


fig05. 篠原一男初期学会論文における模式図

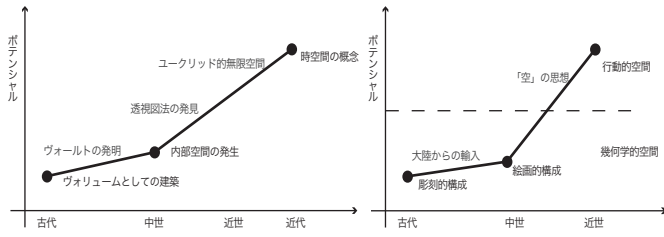


fig03. ギーディオンの『空間・時間・建築』における模式図

fig04. 井上充夫『日本建築の空間』における模式図

■「空の論理」<sup>※3</sup>のため日本建築空間には発展がなかった  
 背景で確認したように、本来ならその時代の思想に応じて空間の概念が「発展」する。井上充夫においてはS・ギーディオンのように空間は「発展」するものとしてとらえられた。(fig03, 04) したがって近世がその空間概念の「発展」の極致として書かれている。

しかし、篠原においてはむしろ中世の「空の論理」により空間概念が「発展」どころか「形成」もされず、近世建築はその「行き詰まり」の極致のように述べられている。(fig01) ここにもう一つの大きな特徴がある。

■「対現象理論」「対現象理論」<sup>※4</sup> 自体は他の研究に無い、篠原独自の理論である。学会論文においては床高に対する考察のみであったが、『住宅建築』においては「対現象理論」により学会論文で扱われた内容を総括している。

### 3. 考察 - 篠原の建築活動に対する初期学会論文の位置づけ及び影響

篠原の初期学会論文から『住宅建築』(1964)そして『住宅論』(1970)への理論の移行、そして実際の建築作品にあらわれた影響について考察した。

#### 3-2. 初期学会論文及び『住宅建築』から『住宅論』へ

『住宅建築』と『住宅論』の目次構成・内容・性格を比較し、そこにどのような差異がみられるか、彼自身の初期学会論文とどう関連するのか、そしてそこに込められた篠原の意図は何であるのかを考察した。

#### 3-3. 感覚か理論か

前節の考察をもとに、篠原の設計における「感覚」と「理論」の問題を扱った。この二つの単語は2-2-1「初期の論文」の篠原の研究の動機として確認した『住宅建築』の中での記述に由来する。すなわち、〈久我山の家〉(1954)を完了した直後、篠原は当時活躍していた若手建築家大高正人・増沢洵・みねぎしやすお・内田祥哉らと交流し、彼らから「感覚が空間の隅々まで通されることでつくられるのではなく、理論が隅々まで通されてつくられたものが建築である」<sup>※5</sup>という考えを得たわけだが、ここでの「感覚」と「理論」の問題が、その後の篠原の課題として一貫して影響していると考えられるからである。

### 3-4. 建築論と作品

前節までの内容をふまえ、実際の彼の作品に現われた影響を考察した。

#### →小結

■『住宅建築』：初期学会論文の成果⇒建築作品での実証  
 『住宅論』：自身の論理の時系列整理

目次構成から見て分かるように、『住宅建築』は初期学会論文における論理を実際の建築作品で実証するという性格をもつ。ここでは作品は「理論」の上に「感覚」をプラスしたものとして語られる。一方、『住宅論』には初期論文との関わりもあまり見られず、作品解説も皆無である。

#### ■「理論」と「感覚」の統合→「感覚」の「理論」化へ

上記からも分かるように、初期の篠原は「理論」と「感覚」を統合することで建築をつくっていたが、『住宅論』には「理論」化された「感覚」によって作品をつくるという姿勢が見受けられる。この姿勢は1970年以降の篠原の作品においてより顕著になっている。<sup>※6</sup>

### 4. 結論

篠原にとって、初期の大高正人・増沢洵・みねぎしやすお・内田祥哉との交流が、建築における「理論」の重要性を認識する契機となり、篠原に建築論としての初期学会論文「日本建築の方法」を書かせることになった。これらの学会論文は、一貫して日本の空間＝静的・無機能的・非合理的なるものという評価を与えている。ただし、篠原はこれらの特色こそが、モダニズム建築の方法が行き詰まった当時においては有効な手段になりうるという立場から、これらの昇華を目指した。その昇華されたものが「様式」<sup>※7</sup>であり「象徴的なもの」<sup>※8</sup>であるのだが、ここに一つの断層が見受けられる。なぜならこれらは「理論」というよりむしろ「感覚」なのである。そして初期以降も篠原は建築作品とともに必ず「感覚」的な言説を残し続けている。つまり、初期の篠原は学会論文の「理論」と自身の「感覚」を重ね合わせることによって建築化をおこなったが、それ以降は自身の「感覚」を「理論化」(厳密には「言説化」)したものと建築を対応させたということがいえるのではないだろうか。

※1「静的」:「分割的手法」による平面構成や「視点」の意識などに見られる日本の空間性。人の動きや時間空間概念が考慮されていない性格として論じられている。(「無機能的」「非合理的」)  
 ※2「動的」:「連続的手法」による機能主義的平面構成や時間空間概念など西欧に育まれた空間性。(「有機的」「合理的」)  
 ※3空の論理:現在の世界における実体的なものに対する無関心、絶えず変化し揺らぐ空間概念。  
 ※4「対現象理論」:人間が生活する空間の構成において、あるひとつの現象が生ずる時、それと対称的な性格をもった現象が組み合わせられて存在することがある。これを対現象理論と名づける。とされている。(「床高に現れた対現象-日本建築の方法(12)」日本建築学会論文報告集第103号・昭和39年10月(1964))  
 ※5この間の三年間に私にとって建築の方法論という考えが初めて問題になり、後に、「日本建築の方法」と題する一連の建築論の研究を続ける手がかりをつかんだ。久我山の家を完了した直後、当時すでに若い建築家の先頭に立って仕事をしていた、大高正人・増沢洵・みねぎしやすお・内田祥哉たちと五人の会を作る機会に恵まれた。(中略)建築は感覚によってつくられると考えていた私にとって何よりも印象的であったのは、建築は理論によってつくられているという事実をまのあたりに見たことであった。感覚が空間の隅々まで通されることでつくられるのではなく、理論が隅々まで通されてつくられたものが建築であるという考え、それは単なる方法の相違であると理解するだけで私にはすまなかった。(『住宅建築』p128)  
 ※6多木浩一「続・篠原一男論-意味-の空間」新建築46(1)1971.01、伊東豊雄「住宅と作家-篠原一男論-ロマネスクの行方」新建築51(13)1976.11などの小論及び、篠原の1970年以降の言説から読み取れるであろう。  
 ※7「様式」:おそらく建築家自身も主観性・オリジナリティのようなものであろうと推測できる。  
 ※8「象徴的なもの」:篠原が日本建築の方法の抽象化の末に抽出した概念。これが篠原にとっての「様式」となった。